□建物名称

御堂ビル

［竹中工務店大阪本店］

□建物概要

竣工年月：1965 年（昭和 40 年）3 月 31 日
構造規模：地上 9 階　地下 4 階　延床面積：44,592 ㎡
用　　途：オフィスビル［竹中工務店大阪本店］
設　　計：株式会社　竹中工務店　（岩本博行）
施　　工：株式会社　竹中工務店　http://www.takenaka.co.jp/

□特　　徴

・御堂ビルは、関西を代表するゼネコン竹中工務店の本社ビルである。
・大阪の都心には竹中の手掛けた建築が多い。
竹中工務店のビル建築には、テーラーであつらえたオーソドックスなスーツのイメージがある。伝統的な型に従っているように見えるが、窮屈さはなく、きちっと身に合い、どことなくしゃれていて、細部の仕上げが丁寧で美しい。
・御堂ビルは、そんなイメージ通りのオフィスビルであり、1960 年代の竹中を代表する作品と言えるだろう。
・設計は当時、竹中工務店設計部をまとめていた岩本博行（1913～1991 年）である。

□竣工当時の記事

・『建築と社会』1965（昭和 40）年 5 月号の巻頭に竣工当初の御堂ビルの写真と記事が掲載されている。竣工当初、御堂ビルが建築専門雑誌に掲載されたのは『建築と社会』一誌だけであった。

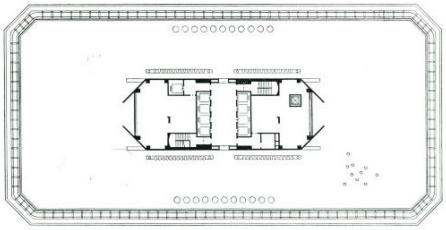
・「設計者のことば」

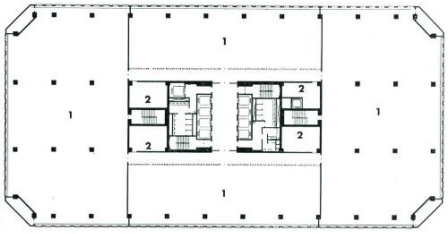
・隣地境界より充分な距離を取り、裏表のない外観をもつ建物とし、格調の高い雰囲気を醸成することを目指した。

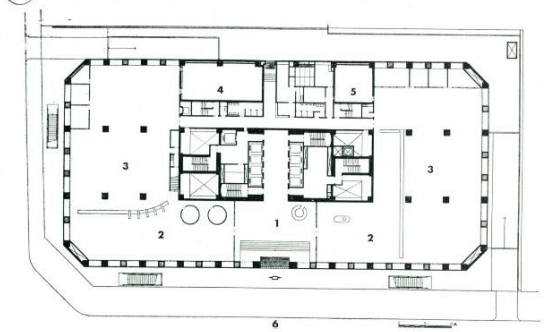
・建物中央にコアを設けてその周囲に事務室を配置し、隣地と外壁との間に適度の空地を設けたことにより四周より充分な採光が得られ、どの場所においても等しく好い環境をつくることができた。

・東西方向 12.6m、南北方向 7.2mの大スパンによる柱配置は、間仕切、家具のレイアウトに拘束を与えることを少なくし、便利と好環境を同時にもたらすことにつとめた。

・材料、色彩、ディテールを極力統一した。







□端正なオフィスビル

・基準階の平面図が非常に美しい。基準階はまさに建築計画の教科書にあるセンターコア型の事務所ビルの平面図である。ここまで美しく納まるまでに費やした時間と労力が感じられる。

・建物全面をタイルで覆い尽くすビルを岩本博行はいくつか残しているが、御堂ビルはその最後の作品と位置づけられる。外壁のタイルは茶色、灰色、土色の 3 系統の濃淡で 6 種類の色調を混ぜて貼られている。

・御堂ビルの場合、1 階の銀行営業室部分と 2 階以上の事務室のスペースはデザインも必然的に違うものとなる。

・1 階壁面はショーウインドウとして構成され、2 階壁面線より 1.2m後退し、影をつくり、立体のバランスをとっている。
1 階壁面の後退は、デザイン面だけでなく、多くの人々が通る街路への心遣いもあったと思える。雨宿りの軒下のような空間は、敷地際を半公共的な空間としている。

・御堂ビルができた昭和 40 年前後、日本はやっと戦災から本格的に復興し、大阪でも御堂筋の街並みがほぼ完成した。

＜（一社）日本建築協会会誌『建築と社会』2009 年 7 月号掲載
「再読 関西近代建築 御堂ビル」（橋寺知子）より抜粋＞